

音楽と私

—声との格闘の半生—

私と音楽との本格的な拘わりは大学に入ってからです。

大学は北海道学芸大学（今の教育大学）函館分校小学課程で、音楽が何となく好きだったので音楽研究室に所属させて頂きました。音が狭くて高音を出せない、楽譜は全く読めない、指もさっぱり動かない状態でのスタートでした。指が動かないので「ハノン男」（指を訓練するための練習曲）ばかり弾いていたので「ハノン男」というあだ名を頂戴しました。その後、ベートーヴェンのピアノソナタやモーツァルトのレクイエムの素晴らしさを知り、音楽の世界にのめり込んで行きました。

大学卒業後、函館市内の新設校である深堀中学校に赴任し合唱と名曲鑑賞を中心に指導しましたが、赴任3年目の文化祭で演奏したヘンデルの「ハレルヤコーラス」を、当時の藤川光夫校長先生の勧めで卒業式にも演奏しました。8クラス300人の演奏は結構迫力があり、北海道新聞でも紹介されました。しかし、深堀中の生徒の多くが進学している北高で音楽を指導していた寺中哲二先生（大学の先輩）に、「あなたの学校の卒業生は高音が詰まっている」と言われましたが、その時は、その意味が分かりませんでした。

7年後に札幌に転勤し、友人の紹介でボイストレーナーの青木先生の指導を受けました。「何か歌って御覧」と言うので歌を歌いだすと、先生は急にガラガラ笑いだしてしまいました。そして、「あなた、テナーでしょう。テナーの声はこうなのよ、ホホホホ……」と軽い声を出されましたが、後に、その声は裏声であることが分かりました。

札幌での赴任先は小学校で、学級担任を受け持ったため全教科を指導しなければならず、教材研究に時間を取られて音楽を楽しむゆとりがありませんでした。3年後に意を決して音楽専科を採用している東京の教員採用試験を受け、北海道は在職10年で退職し東京に出てきました。私は音楽一本に絞った指導をしたかったので、36歳の時です。

東京に出てからも青木先生に教えて頂いた声の練習を続けましたが、初めは喉の詰まったか細い声で歌声としては使い物になりませんでしたので、この声で本を読む練習を始めました。1年程すると軽く伸びのある高音を出せるようになり、声帯が2通りに振動していることが自分の身体ではっきりと分かりました。

2年目の夏、郷里へ帰りのこの練習をしていると姪たちが面白がって真似をしましたが、その声は驚くほど美しい声で、正に頭声そのものでした。その秋、甥の吉田明彦君の結婚式がありました。それまで私は、何冊もの発声指導書を読み10年以上も必死に発声練習を続けましたが美しい高音は獲得できませんでした。甥は発声指導など全く受けていないのに幅広い音域の豊かな美しい声で自在に歌を歌っていました。そして自分の結婚式で歌を歌いますと、叔父が、「明ちゃんの裏声いいもなあ」と言いました。私は目から鱗が落ちました。甥の伸びのある軽い高音や、私が青木先生に教わった高音は裏声だったのです。

それまで洋楽仲間では、男声の軽く伸びのある高音は頭声（とうせい、Head Voice=頭部によく共鳴した声）と考えていましたが、頭声という専門用語を知らない普通の日本人はその声を裏声と言っていたのです。洋楽の発声理論では、一般的に裏声はファルセットと同義語と考え、本格的発声では使い物にならない声であるというのが定説でした。本来鍛えなければならない声を使い物にならない声であると考えていたのです。

これを契機に、多くの人の声や発声指導書、共鳴に関する文献を調べ、「地声と裏声が声区である、共鳴とは無関係」という内容をプリントして墨田区の音楽専科の方々に配りました。先生方は、「学界に定説が無いものを小学校の音楽専科が論じたって…」と相手にしてくれませんでした。このプリントが縁でファルセットが発声の出発点であるというフースラーの発声理論を研究している日本声楽発声学会のテキストを入手しました。

足立シニアアンサンブル会長 高橋昭五

そして喉頭の素晴らしい構造を知り驚嘆しました。また声帯は主要部を声帯筋が占め、縁辺部は声帯靭帯で構成されていることを知りました。

しかし上記の経験から、テキストの記述内容に納得できない所があり、原書に当たってみると、フースラーを紹介した須永義雄先生が主要なところを自己流に解釈しており、ファルセットが発声の出発点であるという最重要な視点が不明になっていることが分かりました（SINGING: THE PHYSICAL NATURE OF THE VOCAL ORGAN by FREDERICK HUSLER）。

原書を読んで、私なりにフースラーの考えが理解できましたので、「それは裏声だった—発声のメカニズムに関する考察—」というタイトルで千部ほど自費出版し、各方面に配りました。私の最初の出版物でした。

東京へ出て3年目の1月のことで、一つの仕事をしたという実感がありません。裏表紙には「この小論を長年の病苦に堪えた母の霊に捧げる」と記しました。母は、私の出産後に体調を崩し、最後の数年間は寝たきりになっていました。東京へ出てこのような仕事が出来たことを報告したかったのですが、母は前年の暮れに他界し、それは叶いませんでした。私が東京へ出ることを告げた時の淋しそうな眼差しが脳裏に焼き付いています。

冊子を郵送してすぐ日本声楽発声学会理事の石塚靖先生から電話があり、「発声開眼である」と言って下さいました。声を発声器官の筋電図で研究していた久留米大学の平野実先生からは長文のお返事を頂き、「大変美しい結論です」とのお言葉を頂き、先生の書かれた貴重な論文を送って下さいました。また、当時の東京都音楽研究員仲間の平野元清先生は、「29ページの冊子に込められた科学的な研究姿勢に畏敬の念を抱くものである」と専門誌で紹介して下さい、大学の先輩の木村喜久三先生からは、「これで発声のモヤモヤが消えた」とのお便りを頂きましたが、同期のテノールのA君には理解してもらえませんでした。定説が根本から間違っているという考えですから致し方ありません。慶応大学講師の石井末之助先生は、「切込みが凄いな」と言っておられました。音楽之友社の「音楽教育」にも投稿させて頂き、大きな反響がありました。日本声楽発声学会でも、「声区とアンザツの解釈を巡って」というタイトルで発表させて頂きました。

高音は、「ファルセット」「支えのあるファルセット」「純粹の頭声」「充実した頭声」の段階を経て訓練すべきであり、これらの声は全て裏声である趣旨を発表し納得して頂きました。須永先生もその場におられましたが、何も言われず、その後、自らが中心となって設立したこの学会を退会されてしまいました。

小学校歌唱指導の大先輩である伊藤雅子先生から丁寧なお便りを頂き、「九州からいらした方が、わざわざ来た甲斐があったと申しておられました」とのことでした。学会理事の宮原卓也先生は、「颯田先生があなたの考えと同じです」と申され、文献を調べようと思いい、石井先生の紹介で慶応大学医学部へ行きましたが、「医者でない方は利用できません」と断られ、当たって砕けるの精神で東大医学部へ電話すると、「所属長の依頼があればよろしいです」とのこと。早速、橋本重紀校長先生に依頼文を書いて頂き、夏休みに10日間ほど東大医学部附属図書館で文献研究をしました。そして昭和8年の「大日本耳鼻」に、颯田先生の次のような論文を見つけて愕然としました。

続く▶